

〈原著論文〉

人間福祉学の科学的宗教へ向かう展開 [第2部]

—軸芯に位置づく福祉—

牛 津 信 忠

抄 録

真の主体的存在=愛としての統合主体，すなわち神を指し示すことが出来る。その神の位置を仰ぐ行為的実質の態様が福祉であり，それに関する科学的宗教における人間学が人間福祉学である。

人間はそうした人間福祉の実践を通じて神の啓示の道に在ることが出来る。ホワイトヘッドの言う神をさらに探求すると，主体たる神の作用性のなかに内包される実在を見出すことが出来る。その神は創造的前進を可能にするベクトル性を有する作用主体ないし作用掌握体という位置から抱握をなし続ける。その抱握プロセスにおける真の主体存在が愛としての統合主体であることを発見出来る。人間福祉の実践は，いつも愛としての神の作用と共にある。

キーワード：リカバリエ，抱握作用，連続，科学的宗教，幸福主義，

(第2章4の①までの各章及び各節については [第1部] として聖学院大学論叢 33 巻に掲載済)

② リカバリエへの帰着

③ インクルージョンということ

④ 人格主体へのリカバリエ

5 人格主体の高揚から幸福主義まで

6 人格主体の透明性と継続的抱握

第三章 宗教性の根幹主体と人間存在の存立根拠

1 人間の人格における主体と神の存在

2 人格主体と神を関係づける霊性の働き：両者の連結項としての幸福主義

3 幸福主義の存立が存在の継続を支える

第四章 科学的宗教を根幹とする人間福祉

1 人間福祉学と宗教

2 科学的宗教によって根拠を与えられる福祉の方途性

3 真理と聖との連動作用

4 真の人格主体としての存在

第2章 4-② リカバリエへの帰着

リカバリエ（帰還）という用語を紐解くと、回復する、快復する、元に戻るといった意味が一般的であろうが、われわれはこの用語の意味を「本源ないし本質への回帰、ないし帰還」と理解する。それは人の生における本源への帰還であり、人が本来保持している内的志向のエンパワーにより、人のそうした意味での主体的志向の発揚を可能とすることをさし示す。われわれは、これをシェラー（Scheler, M）に基づき人間学上の理解からして、最終的には「人格主体」への帰還であると集約して捉える。

この人格主体とは、これまでも触れてきたように⁽¹⁾、内なる深さに位置づけを持つ主体と前方の存在の究極における主体との相互的の一体存在であり、すなわちそれは究極への志向に内在する作用主体そのものである。そうした人格及び主体への営みは個人的人間存在においては啓示を受け止める霊性の元で真に作用化する。霊性については改めて後述⁽²⁾する。

ところで議論を元に戻すことになるが、福祉領域の現況において、このリカバリエという用語はどのように理解されているのであろうか。リカバリエアプローチ⁽³⁾の創設者とされるアンソニー（Anthony, W.）によると、精神保健上の生き辛さからの回復について特化することになるが、損傷、機能不全、障害、また不利を伴っても、それは、人間の生においてはあり得ることとして受け止めることに他ならないと、はじめに理解される。そうしてどのような困難からの回復でも、生じた事柄を否定することなく、良き回復をすることであり人そのものが自ら変わる（自ら進んでいく）ことだとする。確かにリカバリエという用語は治癒に限定されるものではない。この著者の場合には精神保健に限定した議論となっているが、そうした枠を越えても、同一の意味を持つ。特に精神的身体的な困難に視点を置くと、生活のし辛さを担う人の現状を乗り越えていこうとする人間的プロセスの自然な流れの存続そのものとして発言内容を理解することが出来る⁽⁴⁾。

ラップやゴスチャー（Rapp, C. A. & Goscha, R. J.）らは、彼らの著作において、精神保健サービスはリカバリエに明確な出発点を持つか、あるいは精神医学的な障害を持つ人々への抑圧のサイクルが持続するような状況に終わるかのどちらかである、と明確な出発点に立つための問いかけともなる発言をしている。そこにおいて、リカバリエというのは病的症状や不利な条件からわれわれを自由にし、人間の潜在性や福祉へと導くものである、と自由や潜在性の発揚を強調する。それはまた退いていくよりむしろ社会的に共にあるという方向にわれわれを突き動かし、障壁に抗しむしろ可能性を生み出すようにわれわれを誘う。リカバリエを集約すると、人のそれぞれの個性を強化することなのである、と彼らはいふ⁽⁵⁾。さらにディーガン（Deegan, P. E.）を引き、その行為は決して線型的に直線進行するのではなく、曲折を辿るプロセスであると共に、そこには確実に結果が

残されていく、とも主張する⁽⁶⁾。さらに引用されているリジウェイ (Ridgway) の見解を参照すると、その方向性が一層見えてくる。リジウェイ曰く、リカバーとは絶望の後の希望への目覚めである。人生の関与や積極的参加を諦める状況から動的に前に進むことである、受け身的な適応から積極的対応へと進むことである、とする。また精神障害を持つ人として (ある) 一個人を見るのではなく、自己としての肯定的な意識を取り戻していく人として接し共にある、加えてその人の意味や目的に対する阻害からの離脱を可能にしていくこと、とする。まさにそのプロセスは、自己意識、自助の責任性また精神保健システムを越え出た生活を再創造していくことに他ならない。リカバリイは、そうした対応態度とともに、支援とパートナーシップの必要との併存を意味するとされる⁽⁷⁾。

ここに参照されているリカバリイの用語解題はその在り方を分かり易く説いてくれる。さらに彼らが次に取り上げるポウェル (Powell) によるリカバリイの5段階説はさらに構造的にそのプロセスをわれわれの前に提示している。第一段階で個人は病の力に打ちのめされている。次なる段階では、その個人が障害状況へと落ち込むように病がその人を占有し生活ないし人生を制限されたものとしてしまう。第3段階では、その人は病による障害という拘束力に疑念を抱き自身の置かれた状況に問いを発するようになる。第4の段階では、病による障害状況に行動的な挑戦をし始め、被雇用者、学友、教会員等のような役割の増大を受け入れるようになる⁽⁸⁾。最終段階では、人が病を人生への挑戦として捉え直し、病による拘束を乗り越え、人生の統御主体となっていくことが期待される⁽⁹⁾。このプロセスは、線型的ではなく、またこの段階が全てに段階的に当てはまるという定型化したものでもないことはいままでもない。

以上のような議論はリカバリイのプロセスの概略を、流れのポイントに限定しながら指し示している。したがってリカバリイとはその人の置かれた状況次第でケースバイケースではあるが、それでも、リカバリアプローチには、そこに存在する共通の概念あるいは要素を見出すことが出来る。彼らの指摘に添って列挙すると、希望、エンパワメント、必要とされる情報や知識、プロセスの各時点で不可欠な支援、雇用や社会活動、医療対応、自助行為、スピリチュアリティ、熱意などにわたる諸実践の方向がある⁽¹⁰⁾。ここに前述の方向性に内包される方途性が具体において集約される。

前述の「ストレングスマデル」におけるリカバリイには、さらに次のような記述がある。そこにいわれるのは、生活のし辛さを担う一個人に対するあたり、ともすれば自己意識という客体的状況の意識にかかわる病状として現障状態を捉え、その状況を人生の一兆候という経験的様相であると見なし得なくなるが、そういう在り方ではなく、むしろリカバリイというのは、人のその障状態を位置づけていくことであるとされるのである⁽¹¹⁾。これはまさにわれわれの表現でいうならば、客体的側面を客観視すると共に、加えて人を越えた上位統御力でその人を人として捉えるという実践内容を意味している。上位の統御力としてそこに作用しているのは、その個人における自我を超え出た人格であり、厳密にいうと人格主体である。現実状況を捉えるための客観化をなすという対象化をしながらも、それを物化的対象化に終始させずその対象化状況を本当にその人を見つめ

理解するための行為の一端とし、その行為を見つめ、その在り方を内省しながらより良き方向への手掛かりとしていこうとする統御的思考を同時に作用化する主体性をさらなる統御主体の元に作用化していく。こうして主体性の連鎖を絶えず持つ人格主体がそこには作用し続けることになる。

上に見てきた対応モデルの提示者も、さらに、人としてのコントロールの力や人としての目的、また役割責任を持ち初期的ながらも達成していく、また個人的存在性という要素をもリカバリエの要素として指摘している。こうしたこと全てが自我上の個人を越えてそれを統御出来る人格主体の個としての存在性の内なる発揚として理解出来る⁽¹²⁾。

ところで、「ストレングスマデル」においては、リカバリエの心理学的な結果情況として、個人的自己覚知と心理状態との関係が問われている。それは、希望を持つこと、自己効力感を持つこと、自己尊重出来る、関係性の感情を持てる、最後にエンパワメントが取り上げられ、これが第一のリカバリエの構成要素とされる。第二の構成要素は、緊密にコミュニティの統合性と関わる。人は場のなかに生きる存在である。その場は、その個人に家庭をまた仕事を齎し、それが人に満足や所得を齎してくれる。さらに人に豊かな関係性に満ちた社会的ネットワークを齎す。また他の人への相互的な貢献を可能にしてくれる。そうした事柄を喪失すると、そこには精神的崩壊の危険が生じる⁽¹³⁾。こうした指摘は近年のコミュニティ論や地域福祉の議論を彷彿とさせる。またかつてエッチオーニ (Etzioni, A.) が指摘したように、コミュニティは精神的安定を支え、その欠如は精神的な生き辛さに直面する人の比率を高める⁽¹⁴⁾。リカバリエの必要条件に関するこの議論と共に、われわれは前述の箇所でもベルマン (Velleman, R.) やデイビス (Davis, E.) によるリカバリエの共通概念の要素的内容に言及した。総じて共通項として見なし得る概念群である。いずれも前方志向的な力の内在化に結果するプロセスである⁽¹⁵⁾。こうしたリカバリエの充足条件への途は揺蕩 (たゆたい) を必須とする。この揺蕩とは、いうなれば自我領域と人格領域の相互浸透という態様の、またその高揚という方向性のプロセスであり、非連続的連続という自我と人格両者の細やかに交錯する具体的関係状況をそのなかに見ることが出来る。

クライアントとワーカーとの間において、またそれが二者の関係に留まらずグループという形における問題発見と対応をなさんとする営みであったとしても、そこには同様な主体を見出しそれとの共感共同を創る相互性が求められる。上記の各様のプロセスもそのような方向性への歩みである。しかし、相互的な人格性の発見といっても人格そのものが固定的に対象化されない故に明確に、それ、これと指し示すことは出来ない。それではどのような対応における具体があり得るのであろうか。その情況形成は前述した関係構造として捉えられるが、さらに具体における対応行為が示されるべきであろう。上の視点に基づき、注目すべき試みのいくつかのなかで、われわれは実践家の多くが近年示すことが多くなったナラティブアプローチを下記において特に取り上げて、ナラティブということの意味合いを注視しておく。そこには人が心のありのままを表現する、心の底を物語る、そのような試行の意味の提示を見出すことが出来る。

心的な流れに沿って言葉を綴ることによる心の表現はどのような切掛けを持って始められるのであろうか。それにはワーカー・クライアント関係において捉えると、今の心の状況を自由に語ることから、何らかの課題を提供されその反応として言葉を発していく、さらには共に語りの場を持っている人の言葉や状況に対して言葉を発する等々の切掛けを考えることが出来る。語り手の自我状況の現在に合わせてワーカーによるクライアント状況への対象化的判断の元にいわゆる自我上に科学性という知識の限界内で対応がなされていくことが通常であろう。しかし上に述べられた方途によるその人自身のリカバリーの道は、完全に理性的知見としての限界的科学の方途を否定するものではないが、それを理性信仰的に固定的全体とするものではない。与えられた知見の参照の元にも、語り手の語る内容の揺らぎのままに語りゆく事柄を受け止めてゆき、その意味を汲み取っていくことが重要である。そこにある揺らぎや流動性は理性的で直接的な言葉・提示された問いかけへの答えでない場合が多くあったとしてもそれが心の流れであることが重要であり、その語りとそれを通じての共感をワーカーとの間に創っていくことにより、共鳴が生まれていく。共鳴からさらに共感共同へと意識化が進められ、意識程度が深められることによりクライアントの支えが生まれていく。この間柄のなかでクライアントの内面が強められ、心の縛りを脱し、自由が与えられ、そのなかで神の啓示を受け止める靈性の作用たる心的態度が作用として生じていく。こうして知ることが出来るこの内的様態とは、顔（くず）おれそうな心のなかにも汲み取れる内的な主体の方向であり、前方主体への飛翔の可能性として理解することが出来る。福祉上の方途による手掛かりとしての支えが神の啓示を受け止める靈性基盤となる。こうした、一例ではあるが、重要な一例としての心の語りと共にあることによって客体化される自我領域が、主体としての人格領域の影響の元にあることが可能となる。すなわち自己自身の支えを与えられながら生きる手掛かりへの揺らぎのなかで歩みないし行為を試みてゆくことが可とされる。それは主体的存在により統御され、人格性の高揚により自我から人格に至る全体としての人そのものの生活作用化が可能になっていく期待が、希望が生じる。それは主体としての人格領域が、自我との関係において自我的状況へ浸透して統合性を発揮するなかで自我領域に姿を現すことを意味する。上述のリカバーの諸要素とはこのプロセスにおけるプロセスゴールの顕現である。このようにして自我と人格領域の相互浸透の端緒が見出され、その連続が持続されていく⁽¹⁶⁾。

③ インクルージョンということ

生活のなかにおいて障害ないし生き辛さの状況を担う個人が、その置かれた社会経済状況が包含する困難をも越えつつ、人間らしく生き得る状況にインクルードされていくプロセスとして、上記のリカバリー・プロセスの一端を理解することも出来る。それには社会状況の現在に存在する生き辛さの原因を根底から取り除く目途の実現ではなく、何らかの生き辛さを軽減するという現況に合わせた対応がなされるに留まることが多い。そこにいうインクルージョンとは現状への包み込みを意味するに過ぎない。それは現社会経済状況内でのノーマライゼーションである。ここにおいて

われわれは、インクルージョンの二重性に気づくことになる。それは現状へのインクルージョンと、もうひとつは前方にあって人間を本当に生かすことの出来る状況へのインクルージョンである。われわれは前方より示される包摂の真実に従って今を問うのではなく、今の限界のなかで限りある包摂をもってよしとすることに終始してしまうことが多い。この段階では前方にある真実からの声にいつも耳を澄ませることが蔑ろにされるが、それを越えることが必須である。そこでは、リカバリーのプロセスにある希望やエンパワーに象徴される前方への途に揺蕩（たゆたい）状況を呈しながらも歩み出てゆく道が、その道程の形成に関する条件設定により可能になってゆくことが念頭に置かれねばならない。希望については、リカバリーに関する多くの文献が取り上げている。希望の存在の必要性については有力な主張になっている⁽¹⁷⁾。一般に回復力ないし状況を乗り越える力が、人の人生環境がストレスや拘束でいっぱいである時でさえも、柔軟性や積極的適応の経験の余地を残す能力のなかにおいて証明されている。このように希望はエンパワーと接合しながら存在し得るのである⁽¹⁸⁾。こうしたインクルージョンの道が与えられている。

こうした前方志向性とそれへの曲折を心の内を露としていくナラティブ・ウェイに沿って柔軟に道を辿っていこうとするプロセスにおいて、リカバリー、そのためのネットワークが形成されてゆく。さらに、そこに形成される状態の構造と機能を持つリカバリーネットワークとは前に強調した福祉において重視されるコミュニティである。言葉を換えると、日本において地域福祉（未だに道半ばのままであるが）と呼ばれる地域社会が人間の生きる場として築かれていく細やかな人の心に届く方途の総体であるといえる。それは相互主体的な社会的参与の様態と人間が人間らしく生き得る生活構造の全体であるということが出来る。そのような条件設定をインクルージョンの実体化として把握することが出来る。そこに生きる個人は、そのインクルージョンないし包摂により、当該社会からのエクスクルーード状況から離脱していく⁽¹⁹⁾。その包摂とは前方の究極からの導きである。

④ 人格主体へのリカバリー

人格主体とリカバリーについて関連事項を問うときに、われわれは今現在における社会的包摂状況を判断する自我存在及びそこにおける把握状況から段階的に人そのものを捉える各種の福祉的方途にも沿うことの出来る問題解決方途に触れねばならない。シェーラーの思考に沿って問題への対応様態の方向を確認していくと、自我存在の領域から、個的人格の統合性の主体性における高度化プロセスと、社会的人格の統合性における主体的高度化のプロセス、さらには秘奥人格における宗教的統合性の高度化へ向かうプロセスにおける間主観性情況が個々の多様な存在の元で無数に描き出される。この志向の高度化をリカバリーのプロセスとともに捉えると、前方からの統合性のもとにある啓示とそれを受け止める霊性の作用が注視される⁽²⁰⁾。自我存在から発する志向性的人格へ向かう段階的高揚、それも試行錯誤の道をたどるが、その志向性の辿りついた段階個々における統合的自己存立への歩みそのものがそこにはある。その到ろうとする方向性の一点一点を志向する意識的態様として捉えることが出来る。それはその一点一点の意識化と価値づけ、意識されてある内

実を達成する方途とそれに添う行為によって構成されるプロセスである。到りつく一点の価値と行為化前の現意識との相互性からの出発点を捉えるならば、両者の間には、前方の価値からの働きかけを受け止める自我意識による作用力を見出すことが出来る。その作用性が到ろうとする一点があってそこに到る段階における条件整備を伴いつつそこへの道を築いていく。それは現段階の生存が前方の一点からの働きかけを得て開かれていくという形での志向の相互的態様そのものとして描くことが出来る。このように把握を進め、ここにわれわれが導き出そうとする価値としての統合性を組上に載せるならば、前方の一点としてある統合性とそれを価値在りとしそこに到ろうとする志向性は、自我存在における主体と志向されてそこにある統合性へと働きかける主体との間における、すなわちそれぞれそこに看取される主体相互における間主観性として把握できることが明瞭になる。その働きかけは個の内面に発して広がってゆく。しかし、その働きかけに応じた順当な統合が可となる存在の開きを楽観的に受容しているわけではない。これまでの議論において絶えず示してきた両義性に関わるファクターをここで再度想起せねばならない。この両義性は働きかけとしての統合への道の絶えざる揺らぎを、そこにおける試行錯誤、ある場合には存在の閉塞をも伴う態様を内包しながら、関わりの中なかで（条件化された）開きが許容されるときに、存在の持続が同時的に許容され情況内包的な前提が明らかになる。そうした意味で存在の開きを可能とするのは、本質への還元により至り得る可能的（及び方途的）本質の有り様如何である。それは前方の人格主体へ向かう在り方に添うことが出来るかどうかにかつ依ることになる。

人格の最も高度化した次元とされる秘奥人格の次元においては、シェーラーに依拠していうと、愛に開かれた人格として、愛の包摂という存立体を包み込む働きと、包み込まれる存在のその受容力の高度化の程度に応じて包み込む力を増すという形で、間主観性が成立していくことになる。人間における間主観を通じての包み込む主体への参与は、その「自我的固執」故の限界情況に絶えず直面し続けるものの、その高度化は対人また対社会への主体的参与を高揚させ、同時に間主観性の高揚を齎らすということが出来よう。この動的状況とその考察は、「単なる形而上学」等という表現で退けられるような把握ではなく、間主観性の本質への道程である。こうして主体に包摂されながら、自らもそこに存在参与していくことを可能とする歩みが築かれていく。

対象化されないシェーラーのいう人格主体による包摂に応答しそれに存在参与するという開放状態が齎されることがなければ、それは特殊化と特殊化による個々の絶対視、いふなれば人間の世界における（偶像的）神々の争いを齎らすのみとなる。そこにあるとする固定化に終始し、個的存立の流動的生命の開示的躍動性を失うことになる。可能な主体の存立は絶えず前方にあり、対象化することが出来ず、共鳴のなかの動的営みのなかから生じてくる。換言すると次のようにもいうことが出来る。それはその共にある人の内にある見えざる主体を前方の光に照らし見ることによって、まさに訪れてくる。

福祉論上の状況を例に取ると、上述してきた相互に生きる人を固定的論理のなかで捉える在り方

をとる情況は、自我の錯綜に終始し、様態としての流れはあっても、絶えず個人的、社会的さらに広がりを持った向上を閉じることに繋がる。

ここに、極めて宗教観に富むよく知られた社会福祉領域における言葉を挿入しておきたい。それは「この子らを世の光に」という糸賀一雄の言葉である⁽²¹⁾。この言葉は、糸賀の霊性の働きのものであり、それは彼の信仰からする神による啓示の実働であるということが出来る。この糸賀の言葉は方途上の原点を指し示してくれる。それは知的な遅滞情況にあるとされる人々を念頭に置いたものであったが、この言葉の意味合いはその状況に止まらない。ワーカー・クライアント関係、さらには困難を抱える人々を取り巻く人々との全ての関係においていえることである。困難を抱える人々を世の光として、成すべき事柄を探り、それを途として照らし出す光をそこに発見していく。「困難を抱えた人々」をわれわれの行為における導きの光として共に生きる情況形成を求めるのが、この言葉の真意といえる。「困難を抱える人々」、この言葉は福祉（Well being）的生の日常から引き離された非常なる事態にある人々全てに使用可能である。多くの差別、偏見にさらされている人々、今日のこの時を生きることに絶望を感じている高齢者、精神的な多くの重荷で一瞬を生きることに重圧を感じている人々、いじめ暴力に悩む人々、現代の貧困問題に押しつぶされそうになっている子どもや若者達等々、こうした人々全てが本当に人として喜びを持って生きていける支援や在り方を作りあげていく起点として社会福祉はある。そうした福祉的態度は人を見つめる視点をわれわれに告げ知らせる。人が生き辛い困難性から離脱可能なそのような環境を、人間関係を、また制度を作り上げていく。必要なことは何かをわれわれに告げ知らせる役割を、何をすれば良いかをわれわれに知らせる導き手の役割をこの生活上の生き辛さという困難性に直面する人々、困難を抱えた人々が担っていることをわれわれは知らされる。その意味でわれわれが行く途、進むべき道を照らす光の役割を人々が担っていると考えることが出来る。われわれが「生き辛さを背負う人々」を「世の光」として見つめ、そこからその人ないし人々の生き易さを目指してなすべきことを道標（みちしるべ）として明確につかみ取り、それを実行していくことが原点となっはじめて、困難性の中にある人々を光とする支援の在り方が真に現実化していくことになる。それはまさにその人々への存在参与であり、共遂行の生き方である。

これが福祉次元におけるエンパワーやストレングスという用語の表面を越えた次元の有り様たるリカバリーといえる。それはまさにこれまで述べてきた様々な表現を伴う事柄の原点となりわれわれを誘う内実となる人間の相互の本質への帰還に関する具体そのものである。この回帰のなかにある本質を分析的に検証していくと、そこにおいては、社会的側面からの役割を探るためにその志向を方向づけるとともに、個的な福祉次元における相互の関係性の共に生き会う志向の方向づけをも内包していることを知る事が出来る。総じて専門の見地において本質としてこの志向性を堅固に維持することによる本質的状况への対応力の維持が可能になっていく。それは愛の趨勢的動向として前述のシェラーの認識に明瞭に表明されている内容でもある。究極における「神による愛によっ

て人間愛の表出を可とする」として意味付けられる福祉次元において、そのプロセス内に人格論的実質を捉えていくことが出来る。

5 人格主体の高揚から幸福主義まで

上述の議論の全体を受け止めることによって、福祉形成の方途上のエンパワーやストレングスが指し示す次元を越えつつ、乗り越えていくプロセスの延長のなかにあるリカバリイという道へ歩みゆく根源性を知ることが出来る。リカバリイとは本質への帰還であると理解した。それは人格性を媒介にして人間を導く究極の人格主体へと続いていく。それは人格の高揚を指し示すとともに、そのプロセスの一段一段はシェーラーがいう幸福主義⁽²²⁾の最終段階の主体にまで続く。それはその連続において人間存在における対象化できる基礎的自我領域に立脚しつつ、そこにある人間としての存在の価値発揚を可能とすることによって、それとの相互的存立のなかで自己と他者の関係性における相互主体化を実現していく可能性への歩みでもある。その道とは、シェーラーの言葉を用いれば「存在参与」の連続であると表現することが出来る。

ところで「幸福主義」とは、人間存在の土台としての生活の営みにおいて、それもその生活内における価値発揚を相互的に築き上げてゆく歩みを通じて、同時に相互存在参与を可能としながら、可能的に個の抱き持つ価値実現への歩みを進めてゆく。すなわち自己実現の喜びと他の自己実現の充足を可能にし合うという相互的参与の行為の流れをそこに見出すことが出来る⁽²³⁾。そうした意味で相互存在参与とは、相互幸福主義とも表現出来るであろう。自己の内なる可能性の発揮による自己実現とともに他者の自己実現を可能とする他者への存在参与、その相互的存立が相互的幸福主義を形作る。人間の自我上の人格次元における主体による自らの充足をなす自我的対象性の世界は、それと超越的でない対極性をもって両極性を形作りつつ上記した自己実現の高揚のなかで両立し、神の元に在る人格主体として存続していくことが許される。人間における前方主体との同一性を持つ最終主体たる神へのベクトル性をこうして確認していくことが出来る。それが相互的に可能になっていく段階的幸福主義の道に連なる。

6 人格主体の透明性と継続的抱握

前節に述べたように、人間における自我上の位置に発しながら、その人的位置から神の元に在る前方の人格主体への道が辿られるのであるが、その道は先に述べた人間に与えられた本質への帰還であり、リカバリイという営みに他ならない。その辿りゆく道は、単なる問題からの回復ということではなく、真の自己への回帰、すなわち自己存在における自己実現という内実を持つ。これはともすれば自己への執着と捉えられようが、曲折を辿りつつ自らの完成を求めるプロセスを辿ってゆく。その営みには人間存在の高度化のプロセスが内包されており、その道にある限りにおいて、相互性を高めゆくことが出来、相互的存在参与が実現されてゆく可能性が与えられ続ける。それによ

て自己存在は自己実現を段階的に果たしながらもその自己執着と見える自己への固着から離脱して、存在の透明度を高めていき、他者への行為における自利的側面から脱しつつ究極的には神によって与えられる「存在としての有様（ありよう）」への道を進んでいく。そこにホワイトヘッドのいう継続する抱握による行為上の実在が示されていく。それは神による「我有化」であるとともに「占有化」されていく有様（ありよう）の内包である。神は人間存在を個々にまた各段階において客体化し人格の神に依る客体化が段階性を辿って存立してゆく。人間はこの抱握のなかで、抱握主体たる神を与件としてその手の差し伸べに身を委ねることが許される。こうして神への応答的相互的プロセスを経過しつつ、そのなかで、神の意志の貫徹たる愛による統合化への進行が実現されてゆくことになる。このような抱握の連続が延長性の軸芯の原点に在って世界の存続が許されていく⁽²⁴⁾。そのプロセスに透明性が増してゆき人格主体性への道が位置づけられてゆく。

第三章 宗教性の根幹主体と人間存在の存立根拠

1 人間の人格における主体と神の存在

本稿第二章の末尾の二つの節で述べたことをさらに論軸に添って章を改めて解題してゆく。この議論により人間の存立根拠を「科学的宗教」の名の下で根底的に明らかにしてゆくことが出来る。さてホワイトヘッド（Whitehead, A.N.）のいう actual entity（現実的契機とも訳されるが、その意味をも込めて「現実的実在」とし、訳語としている）とは、ホワイトヘッドによると「世界がそれから構成される究極的な実在的事物」と意味付けられている。したがって、「現実的契機」と捉えられる側面を有する⁽²⁵⁾。

この現実的実在ないし現実的契機をわれわれはどのように理解することが出来るのであろうか。第I部においても、ホワイトヘッドの陽子ないし電子についての言説を引きながら上記実在や契機の構成可能性を探ろうとした⁽²⁶⁾が、そこでは電子等を「究極的な実在」として、ホワイトヘッドが指し示そうとする事物と断言することは出来なかった。しかし少なくともその構成の部分に与るとすることは出来るのではないか。現在の量子力学上の議論においても、電子や陽子に意志の働きを見出し事物の交渉や共鳴作用に近接させて理解していこうとする言説を見出すことが出来る⁽²⁷⁾。上記の作用態としての現実的実在の段階性におけるある部分をこの電子という粒子が担うことはあり得るとされるかもしれない。われわれはこの議論に結論を見出すことは出来ないが、ここでは、その論とも関わることになる存在の根底とされる現実的実在の作用的階層性を経て究極に至る作用について触れておかなければならない。それが例えばなんらかの意志を持ち各様の階層性を内在させる作用態であるとする、そこには量子力学の論者のなかにも見られるという作用が及ぶ全事物に神が宿る（all in god）という宗教的発言、ないし、仏教的ともいうことが出来る信仰態様の在り方が見られることになる⁽²⁸⁾。ホワイトヘッドの研究者でさえ、ホワイトヘッドの宗教哲学に万

有在神論を、ないし仏教的色彩の広がり的一端を見出す論者もいるほどである⁽²⁹⁾。こうした主張の元に多神教を奉ずる研究者をも見出すことが出来るのである。しかしわれわれは、特に、このような主張の論者に多く見られる量子論そのものの統計学的学問上の方途性にかかわる帰結に全てを依拠しようとするようになる在り方には疑念を抱く。その方途性に則すると確率論上の結論をもって断定的な解とすることに結果する。それは確かに一つの解であろうが、その前方にある最終的・究極の解を捨て去るものであってはなるまい。そこに到る試行のなかで辿り着く暫定的な位置があるろうとも、その統計的解の道の向こうに道がないとするのは結論を急ぎすぎるのではないか。あるいは、暫定的道程上の一点をもって一応の満足として終止符を打とうとする在り方には同意出来ない。量子論的観点を貫いて究極を見定めようとするときに、このような断定を自我上の思考の内側から断行してしまう傾向が生じる。量子論的志向、また統計的考察の方途に沿うときには、このような傾向に終始することが多く生じ易い。われわれがこれまでたびたび取り上げ、また本稿においても後述しているボーム、D.においても同様である。彼においても、いくつかの宇宙世界の果てから見た全体世界に内蔵秩序 (implicate order) を見出し、そこに存在の根底を位置づける考察の有り様に、それが結果的な影響の原点となるという理解から推して、人間による世界の固定観念的把握に繋がるという断定的側面を認めざるを得ないのである。われわれは量子理論の哲学的摂取を現実的實在にまで到りつつ遂行しながら、ボームに「やや近い」とされるもののホワイトヘッドによる永遠性の前に首を垂れる信仰の姿に同意する。ホワイトヘッドが自己の哲学をプロセス哲学⁽³⁰⁾とするのもそのような意志の表現ではなからうか。われわれは、自我上の過信を越えて歩み続ける存在であり、それは靈性の元に在って唯一絶対の神の啓示を受け続ける存在である。この道こそが階層性を経て多様な道を辿りながらも永遠の神へ向かって歩み続けることが許された人間の生の営みである。ホワイトヘッドは量子論の成果を最大限導入し、その要素的作用たる現実的實在の論を展開しつつ、その統計的確率 (蓋然性) の、さらにそれを越えた高揚展開を追求し、永遠なる超克の道を追求している。ホワイトヘッドも確率判断の統計的根拠を綿密に追求する。結果的にそうした「確率判断の基礎前提された環境と直接経験される環境との間には類似性がある」という判断に至る。すなわち「判断は経験された環境の類似性から導き」出される故に「論議は社会秩序論に戻る」とされる。こうして「前提された環境の統計的基礎に関する一般的に曖昧で不正確な直感」に終始する⁽³¹⁾。しかし、こうした論議とともにホワイトヘッドは「非統計的な確立に到る判断」にも注視を促す。それは「神の原初的な本性を構成する欲求の段階づけられた秩序を、全ての作られたものが抱握する」という原理である。この原理によって前者の不正確な直感も、神の作用の内に包摂される。ここにホワイトヘッドは前者の方向性を越えて「ある前提された状況からある一定のものが帰結することの本質的適合性の直感」を見出す。それは「事物の根底にあり、移行のすべての未決定を解決する諸欲求の根本的な段階づけに基づく」。しかし彼はこの判断を宗教的であると即

断することを戒める⁽³²⁾。この段階は、彼の宗教性へ至る段階的高次元化の初期性を表現するものである。この思索は、まさに彼の宗教的科学の議論における発端である。

われわれは、現実的實在の高揚的階層性のなかで「多」としての神の力の広がりとその根源たる位置としての軸芯を捉えることが出来る。それは次のように叙述される。

神は上述の「現実的契機」に他ならないと理解される⁽³³⁾が、神は一たる現実的契機であるとともに多ないし世界ないし宇宙の現実的契機でもある。すなわち、一たる存立の根底であるとともに継続・延長の元である。したがって神は一つの現実的實在であると同時に、「実質の単一性を代表する」。また「多」として「離接的多様性を伝達する」「存在概念の本質的要素」である。多様な要素的伝達態も本質とともに存立している。全ての（要素的）根源たる「現実的實在」は究極的事実であるとされる。この現実的實在は、「ベクトル性を持つ。それは情動、目的、価値づけ、因果作用を含み、抱握の内に再現されていく」と受け止められる⁽³⁴⁾。このベクトル性が本質を指し示している。ここにいう抱握とは「物理的宇宙を構成する究極的煉瓦」を意味する構成体である。「それは一つの主体における抱握が後続する主体での抱握にとって客体的与件になるような仕方」によってなされていくと、される。こうして「先立つ主体を後続する主体が（その作用そのものを）客体化⁽³⁵⁾する（この対象化は、物化的対象化とは全く異なり、主体の発見を意味する）」。前方には与件、すなわちあるべくしてそこにあり導きの主体としての先立つ存在が前提としてあり、相互的結合がここになされていくことになる。前方からの導出は絶えざる神からのものであり、それに依る一定段階における主体の客体化をなす。後続主体は、前方主体の当該ベクトル性の究極的な啓示を受け与件客体として受け止めていく。このようにして先立つ存在は、結果的に後続態を抱握すなわち「我有化」ないし「占有化」していく。「それらは各現実態の内で、発生ならびに究極的な合成を差配する志向の主体的統一によって結合され」、そうした抱握の結果が連続していく。「それらはさらに主体の限界の彼方で結合される」。こうして「延長の関係性が」形作られていくことになる。ホワイトヘッドは説くのである⁽³⁶⁾。こうした究極的統一へのベクトル性をもって世界は営まれていく。この営みをホワイトヘッドは、「神は事物の根底にある概念的感じの無制約的現実態である」とし、「神はいっさいの創造に先立つのではなくいっさいの創造とともにある」。そうして「神の概念的作用の統一性は、事物の任意の特殊な道程との関連によって拘束されることのない自由な創造的働きである」とする⁽³⁷⁾。これは現実的實在たる神の一であるとともに多であり作用を通じて世界の全てである神の統合性を明確にわれわれに告げ知らせる理解である。人間の個々の存在が抱握における営みのなかに置かれ、自我的存立を経て段階的に主体への道を人格主体の高揚としてたどり、透明性を持つ人格主体へと至るプロセスに自らを位置づけることが許されていく。こうして統計的不確実性が克服されていく。そこに究極への道と歩みがある。

2 人格主体と神を関係づける靈性の働き：両者の連結項としての幸福主義

次に人格主体と神という両者に関連する前に概説した幸福主義についての考察を伴いつつ、議論を進めていく。われわれは、人間における人格の主体を人間のなかに固定的に対象化して把握することは出来ない。その人格とは極めて宗教的な存立性を持つ作用態であるとしてシェーラーは位置づけている。それは人間存在の前方に在って人間を主体化する導きのなかにある、言わば作用としてある。人間に作用を及ぼしそれを主体化する。それとともになお同時に前方存在を捉えるという靈性と表現され得る働きがそこには在る。それは人間のなかに指し示される神の働きである。その作用に内在する人間の自己を越えようとする神への信仰、それさえも神の許しによって齎されるのであるが、それと深く関係を持つ。この信仰により、人間は神の啓示を受け止め、その深まりが神の受容の高揚となる。したがって、人格の主体は人間の内にあるという存立態様を持ちながら人間の制約態の内においては総体的全体的に対象化することが出来ず、神においてのみ主体的に成立する作用主体なのである。その「神の啓示を受容する人間の心の動き」を「靈性」として受け止めることが出来る。その「啓示を受け止める心的作用」を「宗教心」ということが出来る⁽³⁸⁾。シェーラーは、こうした宗教作用について、「神に向かう靈的志向」としている。これには三つの法則性(シェーラー)が示される。金子晴勇に従うと、第一としては、「志向の世界超越性」である。ここにおいては志向主体を含めた全体領域が世界とされており、その全体世界を越えることが意味されている。第二には、宗教作用は有限なる世界によっては本質的充足がなく「神的なものによってのみ満たされる」といわれる。第三においては、「自己自身を開示し、人間に自己を捧げる神的存在者を受け入れることによってのみ満たされる」とされる。この法則性に従い、神と人との関係の動的プロセスが成立していく。そこに在るのは、宗教作用における超越性である⁽³⁹⁾。それは、これまでのモノ世界たる物理的世界を越えることを意味している。しかしこの超越性をその特性のままに充足する方途もそこには示されている。それが信仰であり、その受け止めの力によって神の啓示を受ける靈性という働きが存立する。この靈性によって、「モノの世界」としての物理的世界が神的作用性を伴って乗り越えられる。とするならば、靈性の作用という働きのなかにある超越体の啓示に与る在り方としての信仰こそが解明されねばならない。これによってモノからコトへ、情報へという作用動向が宗教的実在の態様として定立される。信仰が、モノの領域における抱握の煉瓦を積み重ねコトとしての意味と作用の煉瓦を継続して位置づけ情報の流れとの融合的脈絡を可能とする。モノ・コト・情報が科学的な態様表現であるのに対し、それを信仰に発し神的作用の実在としてわれわれは宗教的世界において受け止めることが出来る。神の元に在って信仰的行為に至る道とはどのような道なのであろうか。それは上記の宗教性に基づく作用法則のなかに既に示されている。世界超越性、神による充足、神的存在者の受け入れ、という方向性は永遠なる彼方からの声をわれわれに知らせており、その方向への心を開示をわれわれ人間に求めている。そしてまたそれはそこに至ることによる存在の統一性が神的存在者の受け入れという有り様を告げ知らせ、またそれはわ

れわれが生きている世界の「ここにおける場」という存在から続く永続への道であることを知らしめている。そうしてその道の具体とはこれまで述べてきたように福祉ないしは人間福祉主義という「あなた」への関わりの在り方としてわれわれの前に提示されている。それは愛の充足への道であることが示されてきた。それは言うまでもなく「神の啓示を受容する心の働き」たる靈性を不可欠とする。この靈性とは「自己の身体を越えたところに中心を持つ」「反省や対象化」によって成立するという、プレスナー、H.の論が説明根拠を提供してくれる。金子によるプレスナー理解に従うと、次のような説明がなされる。「遠近法の点は、一点に収斂して無限にのびて消失する。このあり得る一点こそがそこから私達を対象としてみている観察者としての中心である」。この限りなき前方から人間存在を対象化する主体の啓示をわれわれは心の深部で捉えることが出来る。この深部の働きを靈性と捉えることが出来る⁽⁴⁰⁾。「キリスト教の靈性は、自己に向かうことなく他者に向かう愛の中心に在る。これは人間に由来しながらも、同時に神の愛によって生かされている」とされる。さらに「靈性に基づく愛の方向転換」である。こうした靈性の働きは、神の主体に抱かれながら人間が現実の今ある場から他者に真向かう道を造っていくという営みを内包している⁽⁴¹⁾。この道のなかにある神髄がシェーラーにより指し示される「幸福主義」であり、それが神による導きであることをわれわれに知らしめる。その営みは、キリストの昇天による自己犠牲の究極によって他を救い生きる道へ導く行為に集約されることであるとシェーラーは認識する。それが彼の著書内の言説となっているが、それは究極の神の許しと恵みであって、われわれ人間が一般性の元でそこに飛翔することが出来ると思えるのはあまりに傲慢である。そのベクトル性の価値を受け止めながら、そこに至るプロセスのなかでどのように進むべきかを探り続けることが人間の現実の姿であるとし、そのような人間に示される価値方向性を価値として抱き続ける。そうして絶えず抱握の段階性を辿り個々の存立を辿り続ける。このような啓示の元にあり続けることが生のなかにある人間の姿というべきであろう。人間に与えられた靈性によって神に真向かうことが出来る幸福主義とは、このような神の許しのなかにある。

3 幸福主義の存立が存在の継続を支える

幸福主義へ向かう生の連続・高揚という特性を持つ段階性のなかで透明性の意味上の密度を探っていかなければならない。人間存在は自己自身の生の満足という範囲で生きてゆくというシェーラーが示す表現から理解していくと、人は「快樂主義的」にしか生きていくことが出来ない。快樂主義的に生きる人間の幸福主義とは、一般的にいう自らの生きる条件を確保するとともに、それをさらに充実させ、自己の満足を充足するような条件を堅固に獲得することを目途とすることになる。言うまでもなくシェーラーのいう幸福主義とはそのような道筋を肯定するでもなくまた直接的に否定もしない。むしろ本当の幸福がそこにあるのだろうかという問いを潜在性の元で自問するような内的導きを与えながら、真の幸福を問いつつ、終極的にはキリストの行為のなかを示されるように、人

類の全体に自らを捧げる行為に究極の幸福主義の原点を指し示そうとするのである。その思想を字義に示されるままに解すると、自らの苦からの離脱を求める人と共にその苦を取り去る努力のなかにあろうとする福祉の在り方は単なる快樂主義的方途の助長とされ、幸福主義はその否定に繋がるかに見えるかもしれない。しかしここで問わねばならない。苦の除去に繋がる生活構造の全域にわたる確立からその高度化へと向かう道は単なる快樂主義の充足にしか過ぎないのであろうか。そのように捉えることは、福祉の行為を人間の自己主義的満足とその助長とのみ見なすことに結果してしまうことになる。究極的にある、あるべき行為は今現在の苦からの離脱を否定することになるのであろうかという疑問が素朴に問いかげられる。ある人は、そうではなく、この行為を苦痛に喘ぐ人々への恵みの提供であり、愛の実現であるというかもしれない。しかし、それは一方向的充足への働きかけであり、苦のなかにある人はその充足によって問題離脱の解を求めて充足するという一方的な満足に留め置かれてしまう被充足者に終止することになる。ここにおいては十字架のキリストによる究極的行為理解に通じる在り方には真に向うことができない。それではどのような在り方が許容出来る幸福主義として提示され得るのであろうか。ここに段階的に幸福主義的営みが密度高く迎えられることを目途とするプロセスの有り様が、人間存在の現在の次元において問われ「あり得る」道が提示されることになる。それはどのように捉えられるのであろうか。

まずは自我上の人間社会における構造に関する試行錯誤が問われるべきある。特筆さるべき道としては、「互酬的存立」の形であろう。「可能性に応じて提供し、必要に応じて受け取る」⁽⁴²⁾ という必要と提供可能性を明確に見極めるという在り方が許容出来る。この方途の設定により、人間それぞれにとっての人間らしく生きる必要充足の道が社会的具体化、しかも社会の協働性の発露を見出し達成の道へと近接させていく有り様となる。この道の根底には真なる共生としてのボランティアリズムの深化が求められる。このボランティアリズムに基づく相互的可能性と必要性に沿う共生の方途は、愛の社会化たる共生共同としてみる事が出来る。さらには、共に自分を捧げ合う生の在り方の構造化を高めた制度条件の整備として、再分配施策の徹底により、可能性の度合いを経済、社会、生活それぞれにおいて制度化し、相互に生き会うことの出来る状況を社会の土台とする方途の設定がある。苦のなかにある人々を現在の社会経済状況のなかにおいて放置することのない道筋は、こうして生み出されてきたし、この道は今後も重視されてゆく。そうした福祉方策といわれ得る社会経済条件により、人ないし人々への貢献的営みが成立していき、社会次元の相互的支えが現実化していく。それによって、それぞれの潜在的可能性を含み発揚して生きる道のさらなる展開が期待される。こうした構造上のまた相互的な行動上の展開が、前述したような生活構造の確立とともに創造的自己発揚の平等な実現を求め施策的調整がなされていくように期待される。ここに述べてきた道は既に部分的には実施され強化されてきたし今後も可能性を持つ。前述の「この子らを世の光に」という視座は、こうした道における方途上の真理としてわれわれを導いてくれる。こうした方途的広がり、キリストが身をもって示した生命の幸福主義的透明性を発揮していく道と緊密に連動し

ていく。個的に捉えると、生活のし辛さの克服とは、快樂主義という名称を付されようとも、こうした自我上の段階的な生活問題の解決行為が、相互的次元において、あるいは相互的生にとっては、そこに生き会う人間の生における本質への帰還となり、相互的人格主義が固く保持されていく重要な方途となる。それは自我次元に発するものの、人格次元という自らの次元を越えた前方からの導きに接しそれに添う行為を果たしていくという神の究極的誘いによって結実する歩みとなっていく。そのみならず、幸福主義の土台としての理念上の意味をその行為のなかに内在させ、その続行と密度高い社会的高揚が、人間存在の存在継続への道に繋がるのである。

上に述べた互酬性と再分配の展開は、幸福主義の道を人間の生き会う道筋として具体化する土台となっていく。しかしこうした道の現実的基盤のなかでは市場交換の経済が、競争経済として人間の自利的な自我構造の故に存続し続ける。この競争経済の営みは、そのみに留まることなく他の二つの経済社会における方途の作用的高度化によって調整され神の意図に則することを可能とする⁽⁴³⁾。

第四章 科学的宗教を根幹とする人間福祉

1 人間福祉学と宗教

これまでの議論において、人間福祉に関わる宗教的な思索について、あるところでは直接的に、あるところでは流れに沿いながら関連する限りにおいて述べてきた。人間福祉学としての福祉論を広義に捉えた領域で、人間の生活のし辛さに発して生活問題の解決とさらに一層の生活における自己実現の向上を目指す有り様について思索するときに、これは各所で最終的にはキリストの十字架に繋がる幸福主義のベクトル性をもって、さらにはその社会的純化の広がりをもって捉えられる。この行程は、シェーラーのいう意味における人格主義上の道に繋がる。これまで、われわれは、この人格主義を相互性というあらゆる領域で神の元に在る繋がりを内包する相互的人格主義ないし人間の生の主体的協働性として理解してきた⁽⁴⁴⁾。この相互的人格主義は、そのベクトル性のなかに透明性への人格的高揚を内在させている。このベクトル性は神の愛による統合性への導きにその内実の軸芯を持つ。それはホワイトヘッドに添って前述した神の原初の本性において、また結果的本性において、まさにそこに明確に内在し、神の啓示の元に一貫して与えられている。このような福祉と宗教の論をこの章において集約するとともに、科学的宗教として、さらに人間が探究していく学問の要としてのベクトル的位置づけを与えられる論として堅固に確実化しておきたい。それにより、全ての個的存在の生が、神の愛によって受け止められ恵みのなかにあり、人間福祉学とはそのことを確信の段階にまで引き上げることが出来る理念であることを提言していきたい。その考察は、自我論上の思索とそれを越えた神の元に在る宗教上の思索が、福祉の媒介によって許しと導きという形をもって連続していくことを知らしめる。

2 科学的宗教によって根拠を与えられる福祉の方途性

この節において科学的宗教という言葉を再度用いて考察を深める。これまでの議論でもこの用語を用いてきたが、そこでは科学の最先端ともいえる物理学における量子力学に裏打ちされた作用状況と宗教が有機的連続性を保持するという意味においてこの用語を用いてきた。ここで再度この用語を吟味することによって、これまでの議論をより明確化するとともに、その意味をさらに深める作業をする。まず、ホワイトヘッドのいう科学と宗教について、さらに触れていくと、両者とも、「生のままの経験を知的に正当化しようとする」とされる。「科学的関心は宗教的関心の変奏に過ぎない」と彼はいう。しかし両者は「個人的経験の諸相」との「関わり」において異なっている、とされる。科学は「知覚対象それ自身と合理的志向を調和させる」ことに主眼を置く。これに対し宗教は「経験がそこから生起する知覚対象への感性的反応を合理的志向と調和させること」を核心とする。

さらに、科学は「経験において最初の相を形成する与件である……客体」を分析する。宗教は「経験主体の形成」を思考していく⁽⁴⁵⁾。加えて、ホワイトヘッドが宗教を一般的言説のなかでどのように位置づけるかを問う。彼は講演集「宗教とその形成」のなかで次のように述べる。「宗教は……幸福や……快樂を越えたところに現実的かつ推移的なものの機能がなお存在しているということ、すなわち、この機能がその性質を不滅の一事実として世界に告知を与える秩序に付与する」。宗教は、「このことの直接的な理解である」⁽⁴⁶⁾。彼は、それを定義づけにおいて、先にも触れたが次のように述べる。「宗教は内的諸部分を浄化する信仰の力である」また「宗教は、人間そのものと、また事物の本性の永遠的なものとに依存する限り、人間の内面生活の技術ならびに理論である。」「宗教とは個人が彼自身の孤独性を取り扱うやり方である」⁽⁴⁷⁾。そうしてさらに人間の内面の本質領域に関わる諸対応が宗教的作用として展開され、その深さと結びつく現実の価値世界と関連する。それがホワイトヘッドのいう「不滅の一事実」としての「性質」を持つ人間の諸相に対応する「合理的宗教」である。このように科学と宗教は、経験との関わりや客体また主体への思考態度において異なりを有するものの、最終においては全てを包み込む宗教の与件性の元で合理性の軸芯に貫かれて価値世界を形成する。

そこにいわれる価値世界とは、「個人の自分自身に対する価値」「世界の様々な個人の相互に対する価値」「客観的世界の価値」の広がりである。これら価値の「調整」は「領域としての世界」にまで広がっていく、とされる⁽⁴⁸⁾。この世界における価値領域の考察をしていくと、それは宗教と形而上学の繋がりについての議論へと展開していく。形而上学に関わる議論は後述するが、これに科学が関連する限りにおいて下記しておく。ホワイトヘッドは、宗教と形而上学との間を繋ぐ価値について、科学と関連させながら、次のようにいう。科学は、それに関する形而上学を内に含みながら、「科学の一般的記述の実用的な価値」に対して人間が抱く信仰的対応の与件性の背後に自らを隠すことを許される。こうして「科学は素朴な信仰に安住できる」。これに対して、宗教はより

明晰であることが求められ与件とされる主体の分析的理解と信仰へと達していかねばならない。このように「信仰の時代は合理主義の時代である」とされるのである。この合理主義に沿って「創造的過程」が形成されていく⁽⁴⁹⁾。その過程は「経験の所与の類型に維持」を通じて特性を持つ機因を次々に展開し、「現実的世界の安定的秩序」を形作っていく⁽⁵⁰⁾。こうした科学と宗教の統合ともいえる科学的宗教は、合理性と具体、さらにそれらを中心軸とする創造に沿って人間の生存に関わる理念や方途、強いていえば生存における福祉状況を齎す。ここに示される科学的宗教上の営みを前述した現時点の量子論のなかに把握される営みに則して理解すると、先に示したように、波動関数 ψ への動向を辿ることが明らかである(第I部1章2節)。その ψ 動向が明らかになっていくと、モノからコトへという推移を経て情報の存立を捉えることが出来る。これは量子論上の展開といえようが、そこにある様態ないし作用性は神の「原初的本性」として前提的にホワイトヘッドの有機体哲学の展開に示された内容であるとともに前述したような彼の抱握論の内実に連なる。先述のようにその抱握において「神はいっさいの創造に先立つのではなくいっさいの創造とともにある」⁽⁵¹⁾という営みの作用様態を持つ。すなわち「創られたもの」は「神の内に抱握」されている⁽⁵²⁾。

ホワイトヘッドは、前述したように、「現実的実在」に対し「現実的契機」という表現を用いて存在の発端をより明確に説く。それにより言説に「存在」解明的意味を位置づけている。「存在」は「現実的契機からの抽象によって引き出される」。彼は「一つの延長的量子において、ある決定された仕方で相互関連された現実的諸実在の結合体というより一般的な意味において、『出来事』という用語を使用する」⁽⁵³⁾。それは、われわれの表現を用いると、次のようにも表現される。「モノ」から「コト」へ、そして「情報」へという流れは、言うまでもなく展開ではなくそこにあり続けていた科学的事実である。この事実在即して世界の流れの態様の内実を捉える。そうして流れは、ホワイトヘッドの理解に添うと「創造的過程」とされ、移り行きは「転移」していく価値の移りゆきを内包する意図を備えた創造といえる「出来事」として理解される。この「創造的過程」への「転移」によって現実的諸機因が「経験された価値の事例の……生誕に侵入する」⁽⁵⁴⁾。成立していく創造的世界は、「心的機因」が現実化する知識・価値に依る。「意図を備えた創造性は一つの理念を意識している心的被創造物へと帰着する」。「神も……固有の統覚により創造性を条件づける……理念の一種の完全性に則する道徳的判断としての心的被創造物」の段階的存立であると、ホワイトヘッドは捉える。ここでいわれる心的被創造物への帰着とは、段階性をもって人間の現情況に顕現していく神による人間を例示とするような被創造性への働きかけの作用情況を意味すると理解出来るであろう。ここにホワイトヘッドの抱握論におけるプロセスの永遠的客体が成立する一端一端を想起することが出来る。「宗教的洞察はこの真理の把握である」。この真理は、次の真理を土台にする。すなわち、「宇宙は無限の自由を備えた創造性と無限の可能性を備えた一形相領域を提示」しており、「この創造性とこれらの形相とは、完成された理念的調和である神……を離れては、現実性を成就するのに、共に無力である」⁽⁵⁵⁾。このように神は完成された理念的調和であるとして理解され、そ

れ故に全ての基盤である。ここに示されるように哲学も科学も神から発して成立する。そうして神に帰って前進するときに、それぞれは無限の自由と可能性を備えた創造性を与えられていく。このように捉えていくと、神に発してゆく宗教は、人間の理解領域においては、形而上学と切り離して捉えることは出来ない。ここで形而上学に則して少しく述べておく。ホワイトヘッドにとっては、形而上学としての哲学が位置づくが、その哲学は「宗教ならびに……科学と密接に関係することによって」「無力さ……から開放される」。この「両者を、一つの合理的な思考の構図に接合する」「哲学の合理的一般性と結合する」。「哲学は宗教を見出し、それを修正する」。「逆に宗教は、哲学がそれ自身の構図の内に織り込まなければならない経験の与件の内にある」⁽⁵⁶⁾。ホワイトヘッドのいう形而上学としての哲学は、哲学の与件である宗教、その哲学や宗教との結合性を有する科学との関係性を持つ科学的宗教として人間の生きる世界を説き明かす。それは全ての与件たる神の存在故に、全ての営みにとっての根拠となり、その方途性において営みを具体においてまた存在理念において支える人間福祉のまさに人間が生きる基盤となり、その堅固化の高揚を果たし続けることになる。人間福祉の方途性の高揚展開、さらにはその方途性に含まれる施策上の構造的展開を含む福祉全体は、哲学や宗教の具体における支えとして科学が展開性を現実化して連続性を持ち続けていくときに、哲学の総合的視点を充足し、宗教の与件性とも連続性を強化していき、福祉存立そのものも総合的ベクトル性の元に位置づけを与えられ確実化されていく。

3 真理と聖との連動作用

前述してきた議論は、それに沿ってゆくと福祉形成との関連の元に真理を明らかにしつつ「モノ」から「コト」へ、さらに情報として捉えることの出来る「現実的実在」と表現されるミクロの要素的存在を通じてマクロの全体性をも覆い包む作用領域的広がりや元を理解を広げていくことができる。そのなかで最終的に人間とその神への信仰による関わりに沿い、人間が福祉的に生きる道によって生かされる道として示すことになる。その議論は論の流れのなかで真理という人間理性の働きにより明らかにされる内容を念頭に置きつつ、信仰によって抱握の段階を踏みしめてゆく道へと続くプロセスを示唆している。ここで魂の状態に関わる聖について述べることが求められる。すなわち真理を越えた聖への道は、科学的な方途を採用しその流れに従い、科学そのものの本来性に立ち返ることにより、聖との繋がりを持ち連動しながら宗教的志向といえる方向性の元で存立していく。その起点となるのは人間の生においては「魂の状態」への帰還である。

金子晴雄は、著書「キリスト教霊性思想史」においてウェスレーのいう「聖」に関する言説に触れ、彼が聖化を「魂の状態」として捉えていることに注目している⁽⁵⁷⁾。

ウェスレーはこの聖化を「創造者である神の像にしたがって新生した魂と心と霊の正しい状態である」としている。こうして人間における霊が神に帰還するとする。このように神の啓示のなかで人間は創造性への道にあることを生きる道として与えられ、その霊的働きのなかで人格的な正しさ

に則して生きていき、そうした道は、まさに真理に従う生き方そのものであり、そのような存在の持続によって、聖化が人格の主體的成長として可能とされていく⁽⁵⁸⁾。

ここには科学とその基盤である神の誘いと、したがってその科学が手掛かりとする宗教的態様たる霊性への呼び声への応答、すなわち行為的には他者への相互的働きかけ、この道を永遠へと導く真理として受け止めて、生き会っていく人間の相互的存在参与の姿があると理解することが出来る。この相互的存在参与という永遠へと繋がる道は、聖の導きの元で自らを捧げ合って生き会うという絶えざる真理と聖との連動を含み込む福祉的営みとして成立していく。この道程は啓示の元で絶えざる連続を果たしていく人格主体の営みの連鎖でもある。ここにある人格主体は、聖なる神の主体の絶対性の元在り、人間存在における主体のなかに生き続ける霊性を通じて創造へと至り、連続のなかにある新生への導きを絶え間なく与え続ける。

4 真の人格主体としての存在

真の主體的存在＝愛としての統合主体、すなわち神が作用的ベクトル性をもって存立する。その神の位置を仰ぐ行為的実質の態様が福祉である。それに関する科学的宗教における人間学が人間福祉学である。人間は福祉形成の道を辿り、人間福祉の実践によって神の導きの道に到る。世界の構成要素としての「現実的実在」の絶対的作用性が人間を導く原点にあり、それはわれわれの前方の全てのなかであるべき道を指し示す。そのベクトル性は今という一瞬のなかに神の導きとしてある。われわれはそれに包摂されながら生を与えられているがそれを察知するに難い。そのような生の中なかでも、われわれは帰還（リカバリイ）を許されている。

ところで、リカバリイの究極実在の方向にある神とその元在る世界を比較対照して、ホワイトヘッドは次のように言う。「両者を究極的な形而上学的概念」として捉えると、それぞれは「新しさへの創造的前進に掌握」された内実であり、「新しさへの道具」である⁽⁵⁹⁾。

このように表現される世界観について、かなり近接した理解とその表現をしている研究者（理論物理学者、科学哲学者）に、これまでたびたび引用しわれわれの考察にも連動させてきたボーム（Bohm, David）がいる。われわれは、かつて、彼によって記された世界の根底作用を内蔵秩序“implicate order”として理論化した著書「全体性と内蔵秩序」を取り上げ、ホワイトヘッドとの対比の元に理解することを試みた⁽⁶⁰⁾。ボームにとって世界は内蔵秩序の元で動的である、とされた。その折にはボームの議論を批判的に処理するのみに留まったのであるが、本節においては、少しく掘り下げて考察し、ボームにおける究極の世界観に触れながら本稿の最終節の見解を導き出すことによって結論の纏めの一助としておきたい。前稿においてはボーム自身によるホワイトヘッドの存在全体に関する論（特にわれわれが本稿において『現実的実在』と把握する存在の根底作用に関する議論）について「ホワイトヘッドはこれ（ボームの存在の根底論）をやや異なった形で行っている」⁽⁶¹⁾としたが、そのボームの見解にメスを入れて少しく深めておきたい。前稿においてボームの

議論に対し、われわれはその全体性の把握を、「内蔵秩序」に沿う完結性の高い論として評し⁽⁶²⁾ながらも、ホワイトヘッドにおいてはその完結性をあえて形作ることなく、前方のさらなる彼方への、あえていえば永遠性の元にその解を委ねているという理解をしたのであった。こうしたボームの内蔵秩序論に対しては、それが機械論的科学主義に等しいとする論も多くあり⁽⁶³⁾、われわれも前稿においては、こうしたボーム理解に徹していた。しかしボームは、このような理解に対しては、言葉を濁している。むしろ否定するというべきであろう。それはボームに関する各様の議論、またボーム自身の見解としても表明がなされている⁽⁶⁴⁾。ボームによる全体性に関する論の完結性はむしろ遥かなる前方にあり、固定的に確定されたものではないというべきである。それはボームが世界ないし宇宙に対し単一性をもって捉えることなく遥かなる前方の態様、さらにいくつかの態様のなかで捉えようとしていることから明らかである⁽⁶⁵⁾。さらに付加的にいうと代表作ともいえる著書の日本語訳での「内蔵秩序」という存在に関する根底態様の把握が、いかにも宇宙世界の機械論的科学主義的な把握に繋がりがかねないという語感上の性格的側面を拭えないが、この内蔵秩序という言葉の英語表現は、“implicate”であり、それは周りに対し、最終的には回り全体に影響を与えていき意味付けることを表現しており、それから推測すると一定の形態的秩序による機械的道程を示す内容ではないといえよう。したがって、ボームの議論は単純に世界の完結（終焉）までの道程を断定する論理とすることは出来ないと見える。それでもより厳密に見ていくと、疑念を払拭することが出来ない側面もある。多様な宇宙存在が構成する世界の彼方で一定の影響力が力を行使して、周囲を巻き込む力が流動的な存立体としてある形態性のなかで営みを保持するのであれば、それは機械論に近接するとも読み取れる。しかしこの営みを完結への道と断定的に表現するのは避けるべきであると考え。ボームは、そこにある動態を流動的とも見なしながら一定の様態を見定めている。そこには見定めようとする意志があるが、それは臚（おぼろげ）である。臚でありながらも、また推測的でありながらも、人知によって見定めることの出来る implicate order という動態が存立するという発言があると見ることが出来よう。このように詳細に辿って見てくると、ここには永遠性に終焉を託し神の存在を受け止めるホワイトヘッドとは「やや異なる」とボーム本人がいう以上に二者の間には異なりがあると考えざるを得ない。われわれはホワイトヘッドの説く論理の内実にその文脈の真理性を見出すことになる。その真理性は人知ではなく神の聖により支えられる。こうしてボームの論を対比的に見ることに依ってホワイトヘッドの言説がより明白になる。

このように表現理解することが出来るホワイトヘッドの言う神と世界をさらに根底的に受け止めていくと、前述した「道具」を用いて新しさへと進む「神」に通じる神的作用の存在と道具を用いる主体たる神的作用性の作用主体たる究極存在が想念されていることに思い至る。このように見てくると、絶対者としての神とは、ホワイトヘッドのいう神的作用の前方先端において、新しさへの創造的前進を瞬時、瞬時において可能にするベクトル性を持ち続ける絶対作用主体ないし作用掌握体という位置からの抱握をなす主体として、それと永続的な相関性を保持する高次元の絶対主体で

在り続けると認識することが出来る。このように神は位置づけにおける世界との物理的な関係性を永続的に高度化していく究極的な力としてわれわれの信仰の前に在り続ける。

その原初的な本性は、そこに在り展開していく愛による統合性として、ホワイトヘッドに則しながら理解することが出来、その連続性が永続していくプロセスのなかで、その「現実世界の神の本性的統一性において実現される」。それが前述した「結果的な本性」としての実在である。それは「神の物的感じを神の原初的な概念に織り込む」ことを通じながら結果性に至る。こうしたプロセスを経て、神の結果的な本性は概念性を高度に具体化させつつ創造的前進を掌握する神の主体的力動性との一致を高揚的に保持し続ける。このことは絶えず前方に在って許し導き続ける絶対力そのものの永続的存在を証明している。

こうして対象化してわれわれが辿る道にある自我上の存在からそれを内に織り込みつつ主体性を増し、真の主体たる人格主体（三位一体たる神の位格としての）へと到る抱握プロセスが、導きのなかで具体となる。この人格主体として絶えず人間存在の前方に在り続ける導きの作用は、その導きの内に幸福主義的ベクトル性を保持している。この幸福主義とは、高度化されてゆくにつれ人間にとっては自らを捧げることとして理解され、それはシェーラー等においては人間存在の自己否定的な様態として受け止められる側面もあった。しかし、前述もしてきたが、真なる愛による統合を自らの存在を通じて指し示す神においては、人間存在の実体の否定ではなく、人間の真の可能性への道、世界の未熟さ故にそれが人間存在の否定としてしか表出されない現実も在るであろうが、その透明性の究極からの導きにおいては人間存在の相互的人格主義が全てに行き渡ってゆく広がりがある。「真の幸福主義」（捧げ合って生き会う在り方）としてある、と理解される。そのような永続するベクトル状況をその方向性に関する情報解明の学とするのが人間福祉学である。人間福祉学とは、人間のより良き生存を今そこに生きる人間の人格主体としての実在を問い、その人たる可能性の相互的参与のなかに開花していく在り方を求め、その営みのなかに見出してゆく、そのような学問的かつ実践的試行錯誤である。またそうした努力の継続する営みである。それは行為の次元で捉えると、まずは、人間の相互的生存が人間の可能性を発揮していく平等な条件設定の元に在り、その平等性への道が堅固に実現されていくことを不可欠とする。その前提的方向性の道のなかで、人間を物化的対象化することのない科学的方途が問われ、試みが続けられねばならない。それによって人それぞれが主体への道に立つことの出来る歩みを可能とする「潜在性と福祉」を目指すリカバリーという行為への道が存立することになる。その道は前述の哲学を土台にまたその与件たる宗教的方向性を土台に、それに連続する科学的結びつきを以て実現への営みが辿られる。

そうした道程の人間存在からの歩みたる人間福祉とそれに沿って方途性を創造的に形作っていく動態に向かうプロセスがあり続ける。そうした方向性を各様の試みを通じて歩み続けてゆく。こうした道が相互的な人格存立（相互的人格参与）を可能とすることによって地道に堅固に存在していく。その道筋が、神の導きと人間における霊性の神への応答を経て「現実的実在」の営みの事実を

人間を真に生かす福祉として形作っていく。

注

- (1) 拙稿「自我論と人格主体論の現象学的再考第Ⅰ部～Ⅲ部」聖学院大学論叢第25-27巻。こうした人格主体については過去のシェーラー, M. についての論考等において触れてきた。参照されたい。
- (2) 本稿第3章2節に触れている。
- (3) ワレン (Warren, Kate) は, アンソニー (Anthony, W) のリカバリエの定義 (1993), 「人の態度, 価値観, 感情, 目標, 技能や役割を変容させる非常に人間的でユニークなプロセスである」という発言を取り上げ, それを, 病による状況であったとしても「満足, 希望また条件力のある人生の道である」とする。リカバリエとは, まさに精神的な病の大きな影響を越えて人が成長を遂げる「人そのものの側における新たな意味や目的の発揚を包含している」と言えるとする。さらにアンソニーに言及し, 彼が精神保健体系を方向づけるリカバリエの展開における基礎的諸原理を明確にするという。それは, そのプロセスにおいて病それ自身からの回復を含むのみならず, 精神的な病に起因する複合的な影響や損失からの回復をも包含する。それにはスティグマ, 差別等々から生じる社会的除外といった状況からの回復をも含まれる。そうして, 精神保健上の問題が, 社会的障害の形成, 貧困, 失業, 社会的孤立の明証性とも関係するともいう。(Warren, K., *Social work monographs: Exploring the Concept of Recovery from the perspective of People with Mental Health Problems*, Social work monographs, [monograph 198] Norwich, 2003, 15)
- (4) Velleman, R., Davis, E., Smith, G. and Drage, M. (ed.), *Changing Outcomes in Psychosis Collaborative Cases from User's Carers and Practitioners*, BPS Blackwell, 2007, pp. 7-10.
- (5) Rapp, Charles A. & Goscha, Richard J., *The Strengths Model: A Recovery-Oriented Approach to mental Health Services.*, (3rded.), Oxford 2012, p. 14. 本稿においては当該原著を定本にして考察したが, 当著については田中英樹監訳『ストレングスモデル』金剛出版 2014 が出版されており参照させて頂いた。本論においては独自の理解に基づき, 訳語等についても拙論の基軸に添っている。
- (6) *ibid.*, pp. 14-15
- (7) *ibid.*, p. 15
- (8) *ibid.*, pp. 15-16
- (9) *ibid.*, p. 16
- (10) *op. cit.*, *Changing outcomes in Psychosis Collaborative Cases*, p. 9.
- (11) *op. cit.*, *The Strengths Model*, p. 16, p. 18.
- (12) *ibid.*, p. 22.
- (13) *ibid.*, pp. 22-26.
- (14) Etzioni, Amitai. *The Third Way to a Good Society*, demos, 2000., pp. 16-18.
- (15) *op. cit.*, *Changing Outcomes*. p. 9 に述べられている前方志向的な諸目途を想起されたい。
- (16) *op. cit.*, *Social work monographs*, Norwich, におけるワレンの見解も, 多くのリカバーに関する論者の見解を引きながら, リカバリエプロセスにおける自らの状況の受容や希望を持ち続けることの重視を経ながら, プロセスに注視していこうとしている。またさらにプロセスにおけるエンパワメントが自身の良き状態へ向かうコントロールや責任の感覚の獲得と緊密に関係しているとも述べている。(p. 17, p. 18, p. 19)
- (17) *op. cit.*, *The Strengths Model*, p. 25.
- (18) *ibid.*, p. 26.
- (19) リカバリエのための方途としてナラティブ手法を取り上げた。それは内的な思いを言語ないし思いの発露として自由のなかで表現する主体的自己への道である。単なる枠付けでなく自由のなかで主体への道を辿ろうとする。それに則して相互主体化の立ち位置を以ってワーカーが関わっていく。この存在参与的相互性のなかで, またその地獄的实践のなかで, 社会的包摂が進められる。こうし

- た有り様としてのインクルージョンが社会的枠付けでなく個の主体性を第一とする方向でなされていくことにより、地域福祉という福祉領域の「人間が生き易い社会づくり」としての包摂（インクルージョン）が可能になるともいえよう。
- (20) 啓示を最終的には神によるまたその力を通じての教示ないし示唆と理解し、これを受け止める受容の霊的力を霊性と受け止める。
- (21) 「糸賀一雄」（1914-1968）、知的障害者施設「近江学園」、重症心身障害児施設「びわこ学園」創設。
- (22) 前掲訳書（第I部）、Formalism in Ethics and Non-Formal Ethics of Values（シェーラー著作集2『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学（中）』、pp. 290-291）
- (23) シェーラーの「幸福主義」の概念を彼の存在参与の概念さらにそれを拙稿内の「相互的存在参与」（「社会福祉における相互的人格主義」）の概念を用いて理解している。本稿三章2節等に説述している箇所を参照されたい。
- (24) Whitehead, A. N., *Process and Reality*, 1927-28. Cambridge edition 1929, (A. N. ホワイトヘッド著 山本誠作訳『過程と実在（上）』著作集第10巻 松籟社 1984年 p. 43)
- (25) 同書 p. 30
- (26) 第1部1章1節を参照されたい。上掲書『過程と実在（上）』p. 135に依る。
- (27) 山田廣成著「量子力学が明らかにする存在、意志、生命の意味」光子研出版 2014（第2版）
- (28) 上掲書等に記述されている宗教面における見解。
- (29) 例えば 延原時行著「ホワイトヘッドと西田哲学の〈あいだ〉 仏教的キリスト教哲学の構想」法蔵館 2001等。
- (30) ホワイトヘッドの哲学は〈有機体の哲学〉及び〈プロセス哲学〉とされる。宇宙世界の把握の動的側面を感知出来る。
- (31) 上掲訳書『過程と実在（上）』pp. 359-360
- (32) 同書 pp. 360-361
- (33) 神は、現実的実在ないし現実的契機たる「事物の根底にある概念的感じの無制約的現実態」である。ホワイトヘッドは神を上述（本節はじめ）された現実的実在の一側面たる「事物」に留まらず、その根底にある作用と認識する。
- (34) 同書 pp. 31-34
- (35) ここにいう客体化とは、前方の主体に在るベクトル性の受け止めとして理解出来るであろう。
- (36) 同書『過程と実在（下）』pp. 553-554
- (37) 同書 pp. 612-613
- (38) 金子晴雄「キリスト教霊性思想史」教文館 2012 p. 496
- (39) 同書 pp. 497-498
- (40) 同書 pp. 501-502
- (41) 同書 p. 554
- (42) 拙稿「福祉形成における互酬構造とその原点」聖学院大学論叢第32巻第1号 2019における互酬の位置づけはこの視点で統一的に理解されている。
- (43) 互酬に関する論考、上記聖学院大学論叢第32巻 pp. 108-113を参照されたい。
- (44) 拙著「社会福祉における相互的人格主義」2008年、久美出版、160-163ページ。シェーラーにおける人格理解をブーバーの「出会い」論と関連させつつ、相互的人格性を本源的に考察している。
- (45) 上掲訳書『過程と実在（上）』pp. 24-25
- (46) 前掲訳書『宗教とその形成』p. 46
- (47) 同書 p. 32
- (48) 同書 pp. 58-61
- (49) 同書 pp. 48-49

- 50) 同書 p. 66
- 51) 註 37 より
- 52) 上述した議論に関連して、ホワイトヘッドによる「生成」と「連続」に関する量子論上の考え方をさらに引いて関連性を解題しておく。本稿第1部第1章2節に述べたように、彼は粒子の存続実現における完全性に多寡性を指摘し、それは波動として光波の経歴において社会的秩序を含むとする。初期段階で、これは珠数繋ぎの人格的秩序をとるが、「時間の経過につれて漸次消滅していく。その性格上の現象を経て波動は人格的秩序を伴うことのない結合体となり粒子的でない社会として終息する」とされる。このように、本文に述べるように連続そのものが「転移」してゆくのであり、生成内容は連続しないとされる。しかし連続は転移的に生成され続けていく。この概念はホワイトヘッドの抱握論にある「創られたもの」は「神の内に抱握」されていくという中身を波動論的に言い表している。その抱握における我有化と占有化を捉えた表現が上記の内容である。当該註に関しては、前掲書、『過程と実在 (上)』 p. 61 参照。
- 53) 前掲書『過程と実在 (上)』 p. 125
- 54) 上掲書『宗教とその形成』 p. 66
- 55) 同書 p. 70
- 56) 上掲『過程と実在 (上)』 p. 25
- 57) 前掲「キリスト教靈性思想史」 p. 475
- 58) 同書 pp. 475-476
- 59) 前掲書『過程と実在 (下)』 p. 621
- 60) Bohm, David, Wholeness and the Implicate Order, arranged with Routledge and KeganPaul 1980 (D. ボーム著 井上忠 伊藤笏康 佐野正博訳『全体性と内蔵秩序』青土社 1986) この書はボームによる論文集として編集されている。これを定本にして以下の論考において参照した。拙稿「人間福祉学における『プロセス哲学』の意味と可能性 Part III」聖学院大学論叢第30巻第2号 2018 p. 115 及び「福祉形成における両極性と相互包摂性」聖学院大学論叢第31巻第1号 2018 pp. 138-140
- 61) 同稿 p. 139
- 62) 同拙稿 同大学論叢 30巻2号 p. 115
- 63) Wilber, Ken (ed.) The Holographic Paradigm and Other Paradoxes Shambhala 1982 (井上忠 井上章子 山本巍 伊藤笏康 渡辺邦夫 訳『空像とのかして世界』青土社 1986) p. 119
- 64) 同訳書 pp. 113-114, p. 309
- 65) 同書 pp. 523-524

The development of scientific religion for the study of human welfare : welfare situated in the axial core Part II

Nobutada USHIZU

Abstract

The study intends to point out a true subjective existence, that is, the integrated subject of love (i.e., God). The study focuses on welfare as the active element for the operation of God, whereas the humanics of scientific religion denotes the study on human welfare.

Human beings manifest their revelation in God through various practices, such as human welfare. When investigating God, the study aims to determine the entities involved in the operation of God. From the view of an operational subject or an object of operational control, God is prehensile with the vector that enables creative advance. Thus, the study intends to elucidate true subjective existence in the prehensile process as a subject integrated with love. In other words, practices related to human welfare are manifestations of God's operation in the form of love.

Key words: recovery, prehensile process, continuity, scientific religion, eudaemonism